

第2章 人格性の権威

——人格・人間性に基づく権威——

1 豊かな人格・人間性を身につける

古くさく、また口はばつたい言い方ですが、およそ、人を教え、導く立場にある者は人格が優れ、人間性が豊かでなければなりません。これは、誰もが思い至る教育者の基本的な条件です。本章は、このことを示す一つの調査結果を紹介することから始めて、話を進めていきたいと思えます。

福島大学の菊池章夫先生は

“自分の考えるよい先生・望ましい先生”

について、中学生、高校生、大学生、親、小・中・高の教師・校長と広範な被験者を対象に調査しました（一九七二年）。その結果、被験者群の違いによって多少は異なるところもありませんが、どの群にも共通してほぼ最高位にイメージされている教師像が得られました。

それは、例えば、

- ・他人に親切にする
 - ・目標をキチンと持って努力する
- とか、

・他人からの賞讃を求めない

・金銭欲や物欲に負けない

といった人間像ですが、菊池先生はこれを博愛的・目標志向的な態度（行動特性）と承認的・実地的なことを求めない態度と名づけました。これが、観点を変えてとらえれば、ここで言う人格・人間性に当たるものであることはすぐに理解されることと思います。

このように、教師が人格的に優れ、豊かな人間性を持つことは、子どもだけではなく、教師自身も含めて、教育に関心を持つすべての人々から希求されています。この教師の人格・人間性から生まれる権威が、「人格性の権威」です。

「立派な先生だなあ」

「いい先生だなあ」

と思えば、それだけでもう、子どもは先生の言うことを聞き入れようとする姿勢や構えを身につけて接してきます。もちろん、先の章で述べましたように、

「この先生、やるなあ」

「この先生、知ってるなあ」

「この先生、できるなあ」

と思わせる優れた学識や技能も併せ持てば、もつとそのような傾向が強まります。特別な策略を練らなくても、このような先生には、すでに子どもたちは心から敬服してその指導を待ち受けています。

それでは、子どもたちは、具体的にはどのような人格・人間性を教師に求めているのでしょうか。私たち教師は、豊かな指導力を備えるためにというより、まごうかたなく教師になるために、それを知って、いわゆる「人格」の完成をはからなければなりません。教育基本法はその第一条に

「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、……自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」

とありますが、人格の完成をめざすのは何も子どもだけではなく、いいえむしろ、かりそめにも「人を教育・指導する」などという聖人君子でなければできない「不遜」な仕事に就いた教師自らでなければならぬのだと思います。

第一部第2章の表(42頁)を見直してみましよう。これをよくよく見れば、大体のことは分かるのですが、いまま少し詳しく知るために少しばかり古い研究にはなりましたが、山崎正先生の研究(一九五二年)を見てみましょう。

山崎先生は、安定感の対象という観点からどのような教師が望まれるかを調べました。そして

・小学校一・二年生では…… //やさしい先生”

・小学校三・四年生では…… //やさしく、ゆかいな先生”

・小学校五・六年生では…… //やさしく、親切な先生”

・中学生では…… //親切で、公平な先生”

と、望まれる教師像が微妙に変化していくことを示しました。これは、私たちの臨床的、実際の観察の結果ともまったく一致します。これによつて、私たちは、子どもがその年齢に応じてどのような教師を求めているのかが分かり、また全体としてどのような教師が望まれているのかということを知ることができます。

これらの結果を敷衍しますと、教師というものは、一方でやさしさ、楽しさ、明朗、親切といった人間味を、もう一方で公平、清廉、正義、高邁といった徳性を求められているということが分かります。しかしこうなると、

「そんなことはとても無理だ、神様じゃあるまいし」

と言う人も出てきます。

たしかに、それも一理です。まるで神様のような暖かさや清らかさ、そして大きさが求められているのです。並の“凡人”ではとても身につけ得るものではありません。しかし、教

師たるもの、その職業的な役割と使命の重さを思えば、そのようなことはけつして言うべきことではないはずだ。いくら何でもそれに近づくべく大いなる自己錬磨をしなければなりません。そのためにも、今述べた人間味と徳性が実際にどのような内容であるかをよく知っておく必要があります。

私は、多くの児童生徒の声を聞き、また教師をめざす若い学生諸君や教師になって日の浅い先生たちと討議して、子どもから見た教師のありようを以下のようにとらえています。

・「やさしさ」とは、子どもの存在そのものを受け入れ、失敗しても、たとえ間違いを起こしても暖かく見守って喜怒哀楽を共にしてくれること

・「楽しさ」とは、共に遊び、共にむつんで、生き生きとさせてくれること

・「明朗」とは、元気に、明るく振る舞い、力づけてくれること

・「親切」とは、困ったこと、苦しいことに出会ったときに助けてくれることであり、また、

・「公平」とは、みんな平等に分けへだてなく取り扱ってくれること

・「清廉」とは、子どもや親から何かお返しをしてもらおうなどとは思わないこと

・「正義」とは、学校内にはびこる悪や不正と戦ってくれること

・「高邁」とは…、常日頃、高い目標を持って努力すること

「なんだ、そんなことか、それなら自分はまさにその通りだ」

と安心した方もいるでしょう。しかし、このように言葉の上でとらえることは簡単でも、実際に行うとなると、実は大変なことなのです。それが証拠に、というと妙な言い方になります。例えば、教師に対する以下のような子どもたちの声がよく聞かれます。

「失敗すると、すぐ怒るんだ。いやんなっちゃうよ」

「やらせるばかりで一緒にやってくれないんだもん。やる気、出ないよ」

「暗いんだよ、あの先生。こっちまで、元気なくなっちゃう」

「いじめられてるって言ったって、信じてくれないんだ。そんなの思い過ぎだって」

「できる子ばかり可愛いがるんだ、頭にきっちゃう」

「お歳暮じゃ遅いんだって。試験終ったらすぐ送らなくっちゃ、内申書よくならないんだって」

「体罰教師を見て見ぬふりするんだ、おれたちの担任」

「サラリーマンなんだよな、あの先生。なんて言うか、理想とか情熱とか、そんなもの感じないんだ」

もちろん、子どもたちの言うことがすべて事実ということはありません。けれども、「人格」などというものは、偽りようのない人となりそのものですから、いくら飾ってもいつか地が出てしまい、子どもや親からその中身を見透かされてしまいます。もし少しでもそのような実体があり、そしてこのように評価されれば、授業場面は成り立っても生徒指導場面は

とても成り立つはずはありません。第一部第1章で述べましたように、いかに自分はどうだと力んでみても、相手がそのように見てくれなくてはどうしようもないのです。よくよく振り返って私たち教師は、日頃から厳しく練成錬磨して、自らの人格の向上に励まなくてはならないと思います。

2 全身でぶつかる

それでよしとしてしまつてはいけません、しよせん人はみな未熟で未完成なものです。未熟で未完成だと、それならば、指導力を持つことはできないのでしょうか。そのようなことは、けつしてないと思います。未熟なら未熟なりに、未完成なら未完成なりに、子どもと関係を結ぶことができると思います。そうでなければ、まだ若い教師はみな、指導力がないということになってしまいます。

話を覆すようで恐縮ですが、そしてもちろん人格を完成すべく果てしない山道を身をせめて登っていかなければならぬのですが、人格が完成されている―完成されていないなどということよりも、もっと大切なことは、教師が生徒に全身でぶつかり、互いにその琴線にふれあうということではないでしょうか。

人格的に優れ、人間的に豊かな先生だと分かっているとしても、今一つもの足りなくて、教師—児童生徒関係が何となくしっくりいかないという例も少なくありません。それは、子どもというものは、ちょうど赤子がその肌のぬくもりの中で母親を「知る」ように、体と体の、また心と心のぶつかりあう中で人と「ふれあい」、人を「知る」からです。まさに、玩具を奪い合うことに始まり、相撲で組み合い、サッカーでぶつかり合って「ともだち」を知り、がんばって褒められ、できて賞められ、しかし、宿題を忘れて叱られ、喧嘩をして責められて「先生」を知るのです。

第一部第1章に出てくる「係」の先生はいわゆる「人格者」の先生だと思われまします。これに比べて若いクラブの先生ははるかにまだ未熟な先生だと思われまします。年齢や経験年数から言えば当然のこと、また警察に入ってくるときの態度やA男との接し方を見てもそれがよく分かります。しかし、A男との間にふれあいができて指導関係が成立したのは、結局未熟な先生の方でした。もちろん、すでにお分かりのように、そこではそれまでの関係性がずいぶんと異なっていたのですが、それにしてもベテラン先生がかみ合わないのに対して、新米先生はまっすぐストレートに生徒の心に食い込んでいます。正直に裸になってぶつかるところに、先生の心、すなわち「人格」が直截に伝わり、それが理解され、受け入れられたからです。

このように、教師が飾り気なく正面からふれあうところに、教師の人格が受け入れられて、

生徒との指導関係が成立する余地が生じてきます。しかしながら、「裸になってぶつかる」などという言葉はけっして安易に受け止められ、安易に用いられるべきものではありません。「僕はいつも子どもと裸のつきあいをしている」

と言う先生は比較的多いのですが、これは本来、人間的に優れた人だけに許されることで、未熟であることを忘れ、自らを磨くことを怠るような人には、とても許されないことなのです。

「裸の付き合い」をすることを、飾り気なく自分をさらけ出して、「地」のままの姿でふれあうということです。そこで、やさしく、朗らかで、親切な先生が裸の付き合いをするのなら、子どもは大いに幸せです。何故なら、どんな失敗をしても、どんな間違いをしても、暖かく見守り、力づけ、その解決方法を教えて助けるのが先生の自然なあり方で、子どもはそのような先生に受け入れられ、励まされ、助けられて、間違いなくのびのびと健全に育っていくことでしょう。反対に、冷たく、陰気で、不親切な先生の場合はどうでしょうか。子どもはまったく不幸せです。そのような先生が「地」でいけば、失敗や間違いは叱られるだけで、励ましてもらえず、解決方法を教えてもらうこともないのです。おそらく、子どもは萎縮し、心を歪めていくことになるでしょう。

「そんな馬鹿な！ どだい、裸でぶつかる教師に、冷たい人間や、陰気で不親切な人間などいるはずがない」

と、「裸でぶつかる」先生は言うかもしれません。

たしかに、分かりやすくするために、対比的に、極端な形で説明をしたように見えますが、しかしこれは、けっして誇張ではありません。

「掃除をさぼった」子どもに

「馬鹿たれ！ 掃除当番を一回よけいにやれ！」と罰を与える先生、

「宿題を忘れた」子どもに

「そんなことだから、2ばかりとるんだ」と嫌味を言う先生、

「練習を休んだ」子どもに

「もう試合には出してやらないぞ」と怒鳴る先生。

どこにでも見られる光景ですが、どの先生もみんな「裸」でぶつかっています。まさに、「人格」が丸出します。けれども、裸で丸出したからこそ困るのです。先生は生のままの（未熟な）自分を何の反省もなくそのままさらけ出して、情熱的にやっているつもりですが、子どもにとっては、未熟な先生の人格がそのままもろにぶつかってくるだけで、そこには、やさしさや、楽しさや、親切さなどはかけられられません。これがどうして、子どもたちにとつて冷たさや、苦しさや、不親切さにならないのでしょうか。

このような「体でぶつかる」教師には、ときに「猛烈先生」になって、子どもたちに対しやみくもに体罰を加えるという、典型的な落とし穴が生まれます。

「こんなに一生懸命にやっているのに、どうして子どもたちは分かってくれないのか」
あるいは

「こんなに一生懸命にやっているのに、どうして子どもたちはできないのか」

ということ、
「頭にきて」
「つい手が出てしまうものです」。

しかし、これもすべて「裸」でぶつかることの一つの結果であって、ただの体罰ではない、と考えられています。こうした「教育罰」の典型はいろいろなところで見られますが、驚くべきことに、例えば、少年スポーツの指導者の中には大変色濃く見出されます。

私はある頃、小学校でさかんに行われている女子のミニバスケットボール大会を数多く参観する機会を持ちましたが、試合中、また試合後に振るわれる監督たちの体罰の有様には本当にびっくりしました。年齢・性にかかわらず監督（ほとんど全員が当該学校の教師）がまだいたいな小学校五、六年の女子学童を、主催者や参観者の見守る真っ只中で、失敗したといって殴り、負けたといっては打つのです。参観者の中にはもちろん選手の父兄もいるでしょうし、先生仲間も大勢いることでしょう。しかし、そのようなことは体罰を抑止する何の要因にもならないようでした。

準決勝で負けたチームの選手は全員並んでビンタを張られました。一人の子が何か言い訳をしたのか、あるいは反抗的態度をとったのか、何やら監督が激怒してその子を殴打し、彼女は倒れて体育館の羽目板に激突しました。決勝戦に進んだチームの女性監督は、試合中、

逆転されて激昂し、ミスをした選手をベンチに戻し、平手打ちをやりました。またその監督は、ハーフタイムのときに、

「相手はあせっている。ディフェンスでぶつけさせ、反則を誘おう」

と、少年スポーツとしては芳しからぬ、勝ちたいあまりの策略を与えています。

どれもこれも、監督の先生たちは裸でぶつかっています。誰も自分たちが間違ったことをしているとは、露ほども思っていないようです。私はこのようなことが一過的なことではなく、その「世界」ではごく一般的なことだと選手やその親たちから聞いて、このような世界をつくり出しているすべての関係者全員に対して慄然としましたが、それはさておき、「裸でぶつかる」ということは決して未熟な心性を遠慮会釈なくもろに子どもたちにもぶつけることではないことを、ここで強調したいと思います。

恐怖政治が人を支配するように、また、スパルタ教育がそれなりの効果を上げるように、こうした体罰教育も子どもたちを服従させ、「指導」を可能にするかもしれない。しかし、学校教育における教育・指導とは、教育基本法を振り返るまでもなく、子どもの人格の完成をめざすものであり、たとえその場では即効がなくても将来にわたって好ましい影響を残し、健全な発達をもたらす働きかけなのです。そのときどきの教育や指導の内容が、そのときどきだけの「教育や指導（服従）」にとどまるのなら、これは、まことの教育・指導ではなく、むしろ子どもの健全な発達に障害となる外傷体験以外の何ものでもありません。安易な体罰

教育が真の教育・指導に反し、これに当たるものであることは言うまでもないことでありましょう。

ここで改めて言うならば、それ（裸でぶつかるといふこと）は、何ら自己反省することなく一方的かつやみくもに子どもに立ち向かうことではなく、もつとぎりぎりのところで、自分をさらけ出し、全身全霊をこめて子どもたちとふれあおうとする態度や行動のことです。子どもたちは、こういう教師の姿勢の中に何ものにも替え難い貴重なものを感じ、その人となりにふれて、たとえ未熟で未完成なものであってもそれを理解し、受け入れて、教師―児童生徒間関係をつくり上げるのです。授業がまずくても、やさしさや思いやりや明朗さに欠けるところがあっても、こうして教育・指導関係が成り立ってきます。

ここで一つの事例を紹介しようと思います。これはもうはるかに遠い「昔」のことになりますが、かくいふ私の中学生時代の思い出の中から引いたものです。

私のいた中学（福岡県・桂川中学校）は、当時鉾山都市としてにぎわっていた福岡県飯塚市の近くにありました。今風のいじめやけんかなど比較にならない暴力沙汰が日常的にはびこり、体罰を加える教師に対して、卒業式直後に卒業生が仕返しをするなど、蛮気なところでした。

三年生のとき、こんな田舎の学校に九州大学の先生（教育実習生）が来るといふことで、

生徒たちが沸き立ちました。そのころは何しろ、先生といっても大学出などは本当に数えるほどで、まして帝国大学ともなると神様のように思われていましたから、教育実習生であろうと何であろうと、帝国大学は帝国大学、ウチの先生たちよりもうんとよい授業が受けられる、と大ニュースになったのです。

けれども、始まってみてすぐに、それが幻想であったことに気づかされました。期待していた「九大の先生」の授業は、うまくもなければ楽しくもありません。ただただ、まったくの「難解」です。期待が大きかっただけに、失望と反動的な侮蔑とが入り混じり、クラス中が反抗的になってふざけ、騒ぎ出しました。

それでも、先生は真剣そのもの、一生懸命に授業をします。やがて、その真摯さに負けて、大半の生徒はおとなしく授業を受けるようになりました。しかし、今でいう番長とその仲間が数名、面白がって騒ぎをやめず、ひどい授業妨害を続けました。

先生が手をこまねいていたわけではありません。

「授業ができませんから、静かにしてください」

と、たびたび注意しましたが、それがかえっていけなかったのです。言うことをきかなければ体罰を加えるといった、裏を返すと体罰でも加えられなければ言うことを聞かないといった風土がなくなかったところの、その中でも一番元気のよい生徒たちでしたから、先生のいかにも気弱そうな顔と自信なげな態度が逆に彼らを増長させ、すっかり調子にのせた

のでした。

ガチャガチャと筆いれ箱をがちやつかせながら、

「おい、おまえ、分かるか。おれは、なあーんにも分かりやせん」

「あーあ、おれもぜんぜん分かりやせん。これじゃ、高校受験、失敗してしまおう」

「先生、もっと、しつかり授業やってくんしゃい」

などと、それはもうとどまるところをしりません。

とうとう、先生も我慢ができなくなりました。教育実習期間もほとんど終りに近いころでしたが、授業を終えるやいなや、番長の名を呼んで言いました。

「もう、これ以上はがまんできません。今後は絶対に騒がんといてください。今度騒いだら許せなくなりますから、どうか次の時間からは静かにしてください」

訴えるような口調でした。

さすがに番長たちも気がとがめたのか、次の時間、初めは、いつになく静かにしていました。しかし、先生の顔色を覗き覗きしながら、結局はいつもの調子で騒ぎ出しました。

先生の顔が緊張でひきつってくるのが、分かります。それが面白いのか、番長たちはますます騒ぎ立てます。先生が下を向きました。絶句して黙ったままです。番長も仲間も、クラス中が一瞬、シーンとなりました。

思い切ったように、顔を上げて、先生が

「**君、こっちへ」

と、番長を教壇の前に手招きします。

ぎくつとした様子はありましたが、番長はふてぶてしく肩をゆすつて前に出ていきます。そして、

「いったい、なんね。お説教ね。殴るちゅうとでも言うことや」

と、見栄をきります。

生徒たちは、起きてはならないことが起きるのではないかと息を詰めて見守ります。

「許せんちゅうならどげんすつと。やるなら、やっちゃーたい」

と息まく番長をみんなで

「やったれ、やったれ。あんなのたいしたことあらへん」

と、あおつていたからです。

たしかに、番長の方が、背も高く、肩幅もがっちりしています。どうなることか、みんな今になって、ことの重大さに声も出ません。

ところが、次の瞬間、生徒たちは思わず息をのみました。先生の白っぽい気弱な顔が、いっぱい涙をため、しかし必死に番長を見据えて、唇をわなわなと震わせていました。

しばらくはそのままでした。番長はもじもじと、いかにも居場所がないような風情で、下を向いたり、横を向いたりしています。

決断したように、先生が口を切りました。

「僕はもう、どうしたらよいか分かりません。僕は人を殴ったことはありません。殴られたこともありません。しかし今は、君を殴るしか方法がありません。殴り返したかったら、そうすればいい。でも、僕は君を殴ります。さあ、顔を出しんしゃい」

半分泣いて上ずっていましたが、本当に、真一文字です。番長が何か仕出かすのではないかという思いは、もう誰からも消えませんでした。

先生と番長の直立姿勢がしばらく続きます。たまりかねたように、番長が横顔を向けました。しかし、先生の手は動きません。それどころか、蒼白になってぶるぶる震え出しました。なかなか止まりません。

ようやく震えが止まって、

「殴るぞ、殴るぞ」

と、先生が叫びました。それでもまだ手が出ません。

突然、先生は嗚咽して叫びました。

「僕には殴れない！」

しかし、直後に平手が飛んで冴えた音が一つ、教室にこだましました。

懸命に嗚咽をこらえる先生……。ふと気がつくと、番長が反対の頬を差し出して、静かに泣いていました。

いわば、ぎりぎりの極限状況の中での教師権威（統制力）の発動だったと思います。しかし、このときの「先生」に自らの行為を正当化する意識や権威意識があったでしょうか。おそらく、一片だになかったと思います。あるのはただ、ひたすら相手の感情過程に挑み、ぶつかり、入り込もうとすることだけだったのではないのでしょうか。これは、先ほど述べた体罰教師の権力的な、言葉ばかりの「裸のぶつかり合い」とはまったく異なる、全身全霊、全人格を投入した裸の対決です。このぶつかり合いの中でこそ、初めて、先生のひたむきな、真摯な、まっすぐな姿勢、すなわち「人格」が鮮烈に浮かび上がって、生徒の心に伝わり、とらえられ、その心とまっすぐにつながったのです。

教育に対する、また人間（子ども）に対するひたむきな姿勢は、学識・技能といった専門性の次元や、やさしさ・明朗・親切といった人間性の次元を超えて、教師と子どもを信頼の糸で結ぶ「人格的権威」の源となつて教師―児童生徒関係を成り立たせます。これは、公正・正義・高邁といった人格の徳性次元と同じ次元のものであるかもしれませんが、それらと異なるところは、純粹に子どもとの関係の中から生じてくるということです。そういう意味では、次章で述べる関係性の権威ということもできます。

いずれにしても、教師と子どもたちが互いに心の琴線にふれあうような感動の極みのふれあいこそ、真に人格的権威と呼ぶにふさわしい教師権威を生み出す源でありましょう。